

# ワイルドの詩と 世紀末都市

堀江 珠喜

ロンドンとパリ「この二都を離れてダンディズムはありえない」とE・カラシュスが断言しているように、ワイルドもまたここに生活と創作の基盤を置いていた。ダンディの作家にとっては当然のことである。そのためこれらの都市と作品とは次のような関わり方をしている。(1)作品の背景(舞台)となる。(2)その地で書かれた。(3)背景ではないが、これらの都市からインスピレーションを得たり、その特性が表れたりする。このような世紀末都市とワイルドの作品との関係をこの数年調べているのだが、ここでは特にその詩に注目したい。

パリを背景にした作品に「チュイルリー庭園」,「装飾的な幻想」の第二編「風船」がある。1883年,1884年にパリを訪れたときの印象をもとに歌ったのであろう。冬枯れの木々を見て「私が木で子供達が登ったなら花を咲かせるであろう」という気持ちはよほど強かったらしく、「わがままな大男」にこのアイデアが生かされている。が、決してこの詩は庭園を忠実に再現しているわけではない。現在はもちろん当時も、チュイルリー庭園にトリトン像は存在しなかったようだ。つまり多分にこれらの詩はワイルドのイマジネーションによるものなのである。

とりわけ「風船」は、ワイルドの手紙を読むまでチュイルリー庭園を舞台にしていることがわからない。しかもその手紙では、風船で遊ぶのは日本人の子供達がいいとすら語っているのである。もっとも「嘘の衰退」でロンドンにおいて日本の効果を見出すことの重要性を説いた作家にとって、フランス人と日本人との置き換えは、別段不自然な方法ではなかったに違いない。

これらののどかな詩とは対照的な「娼婦の館」は、パリで執筆された。パリの歓楽街を訪れたときの体験に基づいた作品と考えられているが、特にパリらしさがうかがえるわけではない。むしろこの詩においては、パリで執筆されたことの意義を考えるべきであろう。当時のフランスでは流行していたが、イギリスでは公然と取り上げられることのなかった娼婦のテーマを、大胆にもイギリスの作家が扱ったのである。これにはパリの自由な雰囲気の中で執筆したという状況が、深く関わっているものと思われる。同様にファムファタールをテーマにした『スフィンクス』や『サロメ』がパリで書かれたというのも、偶然では

あるまい。

とはいえ「娼婦の館」は娼婦の性を生々しく描いているわけではないし、踊り子達はダンス・マカブルを連想させる。このダンス・マカブルは後の『レディング牢獄のバラード』の中に移入され繰り返される。この事実はパリを舞台にしない作品の中にも、パリの一節が表れることの一例になり得よう。

また『スフィンクス』はパリで仕上げられた詩であるが、パリが舞台ではない。しかしエジプトに行ったこともないワイルドがこの詩を書くにあたっては、身近な材料を利用したはずである。フランスの文豪達の作品やエジプト神話、ルーヴル美術館、大英博物館の展示物などからインスピレーションを得たに違いない。つまりこの作品のエジプトは、あくまでパリやロンドンでの生活を通して描かれたイマジネーションの世界なのである。

一方ロンドンについては、ワイルドの家の近くを流れているテムズ川を素材にした詩がある。「黄色のシンフォニー」と「朝の印象」である。後者のテムズ川、田舎の荷車、シャボン玉のようなセント・ポール寺院、夜の女などのモチーフがすべて『アーサー・サヴィル卿の犯罪』に組み込まれているのは興味深い。またこの寺院の描写は、ロンドンを舞台にしていない「若い王」にも見られる。

さてロンドンとパリとでは、散文も含めて、その描き方に違いがあることに気づく。後者においては、現実からあるいはワイルドの日常から遊離し、イマジネーションの世界と融合する傾向にある。それに対してロンドンがより現実的に描かれるのは、風俗喜劇からもうかがえるように、ロンドンに創作と生活の基盤を置いていたことの表れではないか。

イギリスを非難しながらもワイルドは、ロンドンをなかなか離れようとはしなかった。そして晩年のパリ滞在中、芸術的自由が満喫できたはずであるにもかかわらず、芸術的に不毛であった。身体の不調はその理由にはならない。旅行する元気はあったのだ。また元来怠け者であったことは認めるにしても、それだけでは説明がつかない。ダンディらしくロンドンとパリの二都市を股にかけたワイルドではある。が、やはりロンドンこそ創作活動の基盤であり、その基盤を失った作家は、パリから刺激だけを受けても創作につながることはなかったものと思われる。

(園田学園女子専任講師)